

「太陽が光を失う時」

アモス書 第8章 9節～10節
ルカによる福音書 第23章 44節～49節

説教 岡村 恒 牧師

「時はもう昼の十二時ごろであったが、太陽は光を失い、全地は暗くなって、三時に及んだ。」(44節)あらかじめアモス書に記されていた通り、神のさばき(審判)の日が来て、太陽は光を失ったのです。

この日、神のひとり子、イエス・キリストが十字架の上で息を引き取られた時、私たちのこの世界は光を失いました。この闇は、私たち自身の罪から湧き上がった闇でした。私たちの人生と世界全体を覆う、死と絶望の闇でした。

主の十字架には、罪状書が掲げられていました。「INRI」というラテン語は「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」という意味の言葉でした。(INRI=IESUS NAZARENUS REX IUDAEORUM)確かに、過越の祭のいためにエルサレムに集まっていた多くの人々が、ほんの数日前には棕櫚の枝を手に、戦いに勝利した凱旋将軍を迎えるように、主イエスを〈王〉として迎えました。それまで主イエスが、多くの奇跡を行い、神と等しい力をお持ちであることをお示しになってきたからです。人々は期待していたのです。しかしこの期待は失望に変わり、「十字架につけよ」と求める叫びに変わりました。

聖書は、あの日ゴルゴタの丘で一つの出来事が起こった、と語ります。しかも、神のひとり子の死、というこの出来事は、すべての人の命に関わる出来事だったというのです。主イエスが十字架に架けられ、血を流して苦しんでおられる時、太陽は光を失いました。太陽は、神が全てのものをお造りになり、支配しておられることを明らかにしてきました。神の子が十字架の上で死んだ時、この太陽は光を失い、この世界は闇に包まれました。しかしこの闇こそ、私たちの希望の土台だと聖書は語ります。光と闇とが結びつく話です。

私たちは生まれながらにして神に敵対する罪人です。神無しに生きようとする者であって、滅びるべき者です。神の目に、正しい者だと認められるような人間はひとりもないのです。私たちは誰もが、あの日の闇の中を生きているのです。神に裁かれ、捨てられ、滅んでいく者なのです。太陽が昇っているようでありながら、本当の光とは無縁な者、罪人だからです。

神のひとり子、「ユダヤ人の王」と呼ばれたお方は、十字架の上で、この私たちのために祈って下さいました。「父よ、彼らをゆるして下さい。彼らは何をしているのか、わからずにいるので

す。」(34節)私たちは自分自身が光とは無関係で、絶望の暗闇の中にいることさえ分かっていません。主はこの私たちをご覧になって、憐れんで祈って下さいました。

主イエスは、嵐を静め、病気を癒したお方です。十字架から降りてくることなど簡単なことでした。しかし、ひたすら十字架の上に留まり続け、苦しみと絶望を引き受け、最後までご自身の命を注ぎ出して下さいました。私たちに代わって神のさばきを受け、私たちのためにその命を与え尽くして下さいました。私たちが、もはや神にさばかれることがないためでした。

棕櫚の枝を振って主イエスを出迎えて間もなく、今度は「十字架につけよ」と叫び続けた人々の中に、代々の教会は自分自身を発見してきました。そしてこの私たちのために、神のひとり子は十字架に留まり、とりなしの祈りを捧げ、最後まで私たちを愛し抜いて下さいました。この日、「ユダヤ人の王」はすべての人の救い主、まことの王とされました。

主イエスが息を引き取られた時、神と人とを隔てる神殿の幕は、上から下まで真っ二つに裂けました。神に近づくことができない罪人である私たちが、神にお会いし、神の愛を受けて生きることができるようになりました。主イエスが十字架に留まり続けて下さったからです。

主イエスはこの日、十字架の上でご自身の命を与え尽くして下さいました。暗闇の中で嘆く私たちを、本当の光の中に移して下さいました。そして神は、死んで墓に葬られた主イエスを墓から引き上げて下さいました。死がもはや力を失い、私たちを滅ぼして神から引き離すことなどできないことを、このようにして神は、私たちにお見せ下さいました。

この日、十字架の足下に立っていた百卒長は神をあがめ、「ほんとうに、この人は正しい人であった」(47節)と告白しています。このお方こそすべての人の救い主であり、私たちを暗闇から光に移して下さいるお方であることを知ったのです。主イエス・キリストは、私たちを死から命に移すために来て下さり、十字架におかかり下さいました。御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るようになるためです。やがて、主イエスは再び来て下さいます。すべての人の王として、ご自分の民を、御もとに迎え入れて下さるために。

(記 岡村 恒)